

天長四年正月丁亥、豊前国下毛郡擬大領藤野勝宮守（略）

〔類聚国史〕卷五四・節婦の項）

彼ら渡来人の活躍が後世にまで浸透していたのを知ることができる。

### 三 採銅事業と渡来人

#### 龍骨の山と銅生産

香春岳は南から一ノ岳・二ノ岳・三ノ岳と称し、近年は石灰岩の採掘が著しく、

『豊前国風土記』逸文中にある鹿春神（新羅神）を祀る、龍骨の山として信仰をあつめてきたにしては忍びない様相を呈している。

渡来人を示す史料に『豊前国風土記』逸文がある。

豊前国風土記曰、田河郡、鹿春郷 此郷之中有河年魚在之、其源從郡

東北杉坂山出、直指正西流下、添會真漏河焉、此河瀬清淨、因號清河原

村、今謂鹿春郷訛、昔者、新羅国神、自度到来、住此川原、便即名曰鹿

春神、又郷北有峯、頂有沼 黄楊樹生、兼有龍骨、第二峯、有銅并黄楊

龍骨、第三峯、有龍骨、（略）

〔続日本紀〕卷十）

文面は当時の香春町風情を詠っており、香春岳を龍骨の山（二峯・二峯・三峯）と称し、銅が生産されており、杉坂山を源とする川水は清くすみ年魚（鮎）が捕れていた。そして、「昔者、新羅国神、自度到来」と記されているように、新羅の渡来人が



写真3—2 昭和初期ごろの香春岳

来て神を祀ったとされている。更に、山を龍骨の山と称し、銅の生産を行っていたことが記されている。

『延喜式』中には

豊前国銅二千五百十六斤十兩二分四銖、鉛千四百斤毎年操送（中略）

と記され、毎年銅・鉛が、都である平安京へ納められていたことが分かっている。これらの銅生産は、鋳業神的性格を持った渡来人技術者が関与していたことは十分考えられ、平安時代以前の奈良時代ごろから殖産開発が始まったのではないかと考えられる。『風土記』文中の「鹿春神」は何を指しているのだろうか。『延喜式』巻十の「神名帳」には、「辛国息長大姫大目命神社」の名が記されており、更に『太宰管内志』は、その神社について「辛国は新羅国から来た神である」と説き、古くからこの地域に渡来人等による新羅の神が奉祀されていたことが明記されている。先の『豊前国戸籍断簡』の「仲津郡丁里」の所在は、現在の京都郡一带を中心とした地域を示しているが、隣接する香春町も当然にして豊前国であり、秦部・勝姓等の渡来人における関与が指摘できる。それは、彼らが古くからこの地域を占拠し、秦氏を中心とした部民の集落を形成し、綿や銅の生産を生業としていたことは疑いない。そして、彼らの生活と鋳業的生産業の安全を祈願する意味で「鹿春神」が祀られたのではなからうか。若干時代は下るが、豊前地方と秦氏・勝姓関係の文書がある。連綿と続く彼らの働きが、豊前地方を創つ

てきたと言っても過言ではない。

・宝亀七年（七七六）十二月 豊前国京都郡人正六位上

梶田勝愛比（『続日本紀』）

・延喜四年（九〇四）正月 以外従五位下秦忌寸長足為

豊前介（続日本紀）

・延喜十八年（九一八）八月 豊前国宇佐郡人酒井勝小常

（『日本後紀』）

二つの古鐘 香春岳に隣接して天台寺という寺院がある。古と天台寺 来より優美な新羅系古瓦を出土する寺院跡とし

て周知されている遺跡である。また、同形の瓦を出土する遺跡として筑前大分廃寺跡が知られている。

天台寺跡は別名小字名から「上伊田廃寺」とも言い、『應永戦覧記』には、

勾金の天台寺は、往昔伝教大師帰朝の時、香春の宮に参籠し、修法満散して田川郡に十八個の伽藍を建て、天台別院と号して（略）

天台寺は常に千人の衆徒を會して護持國土の名藍なり

と称して、香春の宮と共に寺院のことを記している。この時、最澄は香春の宮を「明神」とし、延喜二十三年に中国に入唐して、その翌年、田川郡の香春山麓に寺院を建立したことが記され、それが天台宗の始まりであるとされている。ただし、天台寺については明らかにされていない。

天台寺及び天台寺瓦窯の調査は、山本通により昭和五年『福

岡県史跡名勝天然記念物調査報告書』第五輯に紹介されている。その後、昭和六十一年六月十三日に田川市教育委員会の手で、発掘調査が実施され、規模・構造等が明らかにされた。それによると、天台寺の伽藍配置は特異なもので、金堂を中心に回廊が巡り、講堂に取り付く形である。塔は東回廊と重複関係にあつて、東回廊より後出すると報告されており、出土瓦等から寺院造営後間もない時期に建立されていると報告書は結んでいゝる。更に出土瓦については、軒丸瓦五型式一〇八点、軒平瓦三型式五種類三六点が出土し、創建瓦と考えられてきた新羅系軒先瓦の組み合わせ(図3-7・5、6)は、単弁八弁軒丸瓦(図3-7・1)と比較して出土率が低く、創建期瓦の再検討が必要であると考え、新羅系瓦が金堂跡に集中して出土している点を強調している。年代は七世紀の終わりごろが考えられている。

天台寺跡出土の新羅系瓦(図3-7・5、6)は、中房は大きく四十九の蓮子を配し、周囲に細かい雄蕊を巡らしている。弁長は短く、複弁八弁蓮華文である。外区珠文は大きく二二個を数える。外縁は一段高い直立縁で、宝相華唐草文を巡らしている。更に、瓦当頸部にも、珠文帯(しゅもんたい)に囲まれた中に外縁と同じ宝相華唐草文を配している。

同範瓦を出土している大分廃寺の瓦は、軒丸瓦が五型式六種、軒平瓦は六型式に分類されており、両者の組み合わせ四種

が想定されている。創建期の瓦組み合わせは、天台寺新羅系瓦(図3-7・5、6)と同じで、天台寺跡出土の単弁八弁軒丸瓦はなく、創建期瓦と合致していない。このことから、新羅系瓦より百済系単弁八弁軒丸瓦が古いと仮定すれば、天台寺跡は大分廃寺跡に先がけて寺院建立に着手したものと考えられる。

次に、筑前観世音寺鐘と京都妙心寺鐘については、従来から兄弟鐘と言われ、多くの学者たちにより歴史的・美術的に論じられてきた。

昭和五十九年、九州歴史資料館において、両鐘を比較検討する機会が生じ、細部にわたって検討された。兄弟鐘と言われる所以は形状・法量・全体の釣合(つぎあ)い等と、更には梵鐘撞座(つぎざ)の文様、上帯・下帯の唐草文等が新羅系文様を基調に展開している点が指摘された。ただ、両鐘を比較してみると観世音寺鐘の方が大形で表現力が強く、更に、京都妙心寺所有の梵鐘裏面に、製作年代が記されている事実を年代基準として、両鐘は同じ工房で、同じころの年代に製作されたものではないかとの見方が強まっている。

撞座(図3-3)について観察すると、中房は大きく六十一の蓮子を配し、天台寺瓦と同様、周囲に細かい雄蕊を巡らしている。弁長は短く、複弁一二弁蓮華文である。瓦とちがい外区珠文・外縁はない。上帯・下帯の文様は、忍冬唐草文を基調として展開するが、上帯では興福寺軒平瓦の中心飾に類似した

中心文から左右に派生一周し、下帯は中心飾と蔓草を一単位として一周を一四単位が巡っている。梵鐘の口縁内側に「上三毛」の印刻が認められ、笠形上面にも「天満」の刻字がある。

「上三毛」については豊前国上三毛郡に想定される説が有力であり、大宝二年の豊前国戸籍断簡に見える「上三毛郡：」に符合するものと考えられる。つまり、戸籍断簡に見える秦部・勝姓等の中に技術者がいて、この梵鐘鑄造に関与し製作にあたったことは十分に想定される。「天満」の刻字は製作当初のものであるか否か明らかでないが、観世音寺鐘は江戸の初めから明治初年まで太宰府天満宮安楽寺に保管されていたと聞く。

京都妙心寺鐘の撞座(図3-3・6)は、観世音寺のものより一回り小さくなるが、蓮子数や蓮華文の作風は観世音寺鐘と類似するものである。上帯・下帯の文様は右から左に流れる唐草文で、特に下帯文様は、葉状唐草文を呈しており、上帯の唐草文は宇佐虚空蔵寺跡の軒平瓦によく似ていることが知られている。梵鐘内面には、次の銘文が刻字されている(図3-3・9)。

「戊戌四月十三日壬寅収糟屋評造春米連廣國鑄鐘」

この銘文については多くの学者が論じており、「古京遺文」中には狩谷掖齋や山田孝雄らによって文体の注釈が行われている。それによると「戊戌四月十三日壬寅」は「戊戌」が文武天皇二年(六九八)にあたり、四月十三日の干支がちょうど「壬

寅」に符合すること。更に、「収」は具注曆でいう吉日に当たり、梵鐘の完成を祝っているなど考証されている。「糟屋評造」は、当然にして糟屋郡が想定され、従来の郡評論争における各諸説はあるが、この「評」は大宝律令以前を指している。最後に、「春米連廣國」銘は鶴岡静夫によると、仁徳天皇時代から摂津国に居住して、六世紀ごろから筑前国糟屋郡に移住したとされている。つまり、京都妙心寺鐘は春米連によって鑄造されたことになる。

ここで以上のことを整理してみよう。

まず、天台寺軒丸瓦と両寺の梵鐘撞座は、中房蓮子数と蓮弁数はそれぞれ器物により大きさ・個数・弁数が異なるものの、文様形態は同一である。また、それぞれの中房・花弁等の比率は天台寺軒丸瓦・妙心寺撞座・観世音寺撞座が約三分の一倍ずつ大きくなっている。中房から蓮弁への文様創作は三者共に共通性があり、文様の完成度の高さを物語っている。更に、天台寺新羅系軒丸瓦(顎部の文様)・軒平瓦の宝相華文と、妙心寺上帯宝相華文の酷似が指摘される。この流麗な文様は、中国遇賢里中墓玄室第二層持送側壁画や、韓国雁鴨池出土軒平瓦文様に類似しており、中国初唐期の蕨手文や対葉形文を十分に取り入れていることが分かる。この三者の関係を上帯・下帯の唐草文様分析により、天台寺瓦の軒平瓦当面の唐草文が原形になっているとの指摘がある。そして、天台寺の唐草文は他の瓦類と

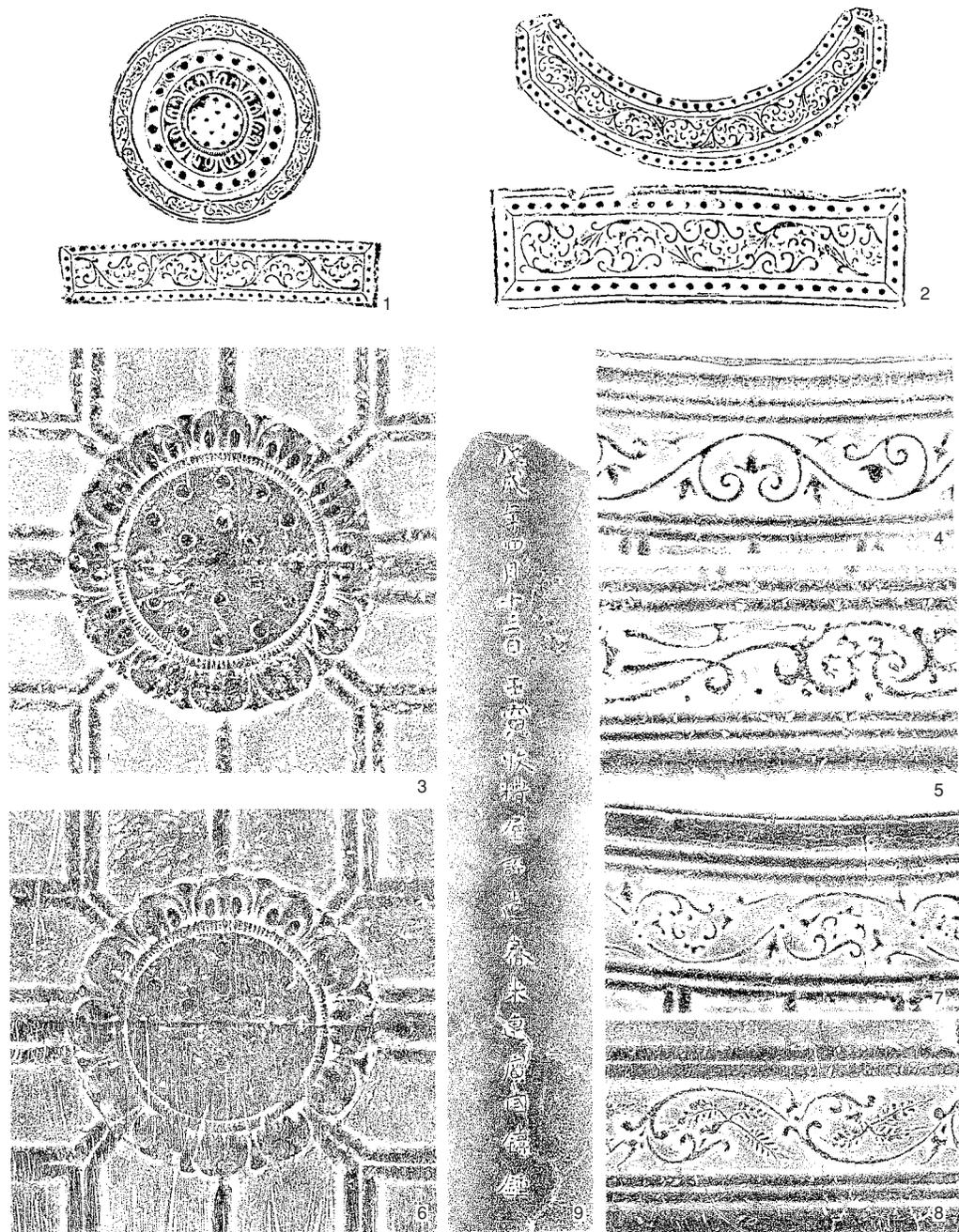


图3—3 天台寺軒先瓦 (1·2) 觀世音寺梵鐘撞座 (3) 上帶 (4)  
 下帶 (5) 妙心寺梵鐘撞座 (6) 上帶 (7)  
 下帶 (8) “ 銘文 (9)

違った、文様の基本台帳に従い熟知した彫刻工人の存在が考えられる。同一の文様を施した軒先瓦・梵鐘撞座・上帯下帯の文様は、同一的組織及び工人関係による工作であり、宝相華文様を基調とする方向性が定められたのではなからうか。それらは天台寺という寺院建築の起因によって製作・展開されたものと想定され、観世音寺鐘・京都妙心寺鐘は天台寺と直接的関与が指摘できる。ちなみに京都妙心寺鐘は妙心寺建立時期からして合致せず、伝世されたものであろう。

以上のことから、京都妙心寺鐘の銘文より「糟屋評造春米連」が梵鐘鑄造に関与し、六九八年に鑄造されたことは前述したとおりである。兄弟鐘の比較では、観世音寺鐘が勇壯で力強い創作との指摘があり、内面窺書きの「上三毛」は、戸籍断簡に見える「上三毛郡塔里」の秦部・勝姓達、渡来人の存在を十分裏付けるものと推考される。また、豊前国所管の天台寺は、伽藍配置が金堂を中心に、中門から講堂へ回廊が巡る形式で、当初から塔は存在していない。塔跡は回廊より後出することが明らかである。つまり、仏像を安置する「金堂」を優先させて建立されている。このことは、新羅渡来人たちの綿生産・銅鋳業を中心に、生活基盤の「祈り」の寺院として、更には、彼ら自身のための宗教寺院として、天台寺を建立した可能性も考えられよう。そこに創作された屋瓦は、我が国でこれほど優美な軒先瓦はなく、新羅系文様そのものであり、彼らの技術の高さ

を「瓦・梵鐘」に見ることが可能である。参考ではあるが、天台寺の伽藍配置は、朝鮮三国時代の寺院伽藍（聖住寺第三期伽藍）に類似しており、我が国の他遺跡に類似例を見ない。

## 第二節 仏教と造寺活動

### 一 寺院の機能と構成

#### 寺院設計

寺院の造営にあたっては、寺域の設定はもちろんのこと寺の設計図等が作成され、更に寺の機能や寺院構成も整備されていた。

寺院には基本的に三つの機能が示されている。

- (1) 定められた伽藍において、仏教の教えに基づいた思想を拡大し、寺院内で儀式を執り行うこと。
  - (2) 儀式の中心となる建物は、塔・金堂であること。
  - (3) 寺院内での僧侶の日常生活基盤である。中心建物は僧坊・厨・食堂・温室などであり、規律正しい作法により生活が営まれる。
- (3) 寺院の運営である。それには寺院を支える経済的な面と維持・管理を行う機能である。経済的には寺田、封戸があり、その面積が寺の大きさを象徴していた。維持・管理は政所や大衆院などの組織がこれにあたり、